

「ごみ箱を空にする」

「初雪が降る」

細村 星一郎（東京都）

イメージの重なり方の詩。上から下へ落下するもの。

それがちり紙でも初雪でも何処かに切なさが残る。

「ごみ箱を空にする」に《空》という言葉があることにより

その後の初雪のイメージの飛躍の補助となって、心地よい読後感が生まれている。

きみの眼は哀しく光る

ぼくの背に乗って見ないか

ステゴザウルス

いろは（京都府）

大きな動物の眼は何故あんな哀しいのだろうか。

動物の大きさは様々だが、目の大きさとなると話が違う。

図体に似合わない円らな眼の哀愁がステゴザウルスにもある。

あの眼を見つめていると、その図体の大きさを忘れて

自分の背中に乗せたい気持ちはよくわかる。

中山俊一